

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 7 日現在

機関番号：13201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520460

研究課題名(和文)『羣經音辨』第六巻の研究

研究課題名(英文)A Research on the Volume 6 of Qunjing Yinbian

研究代表者

森賀 一恵 (MORIGA, Kazue)

富山大学・人文学部・教授

研究者番号：60243094

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：『羣經音辨』第一巻～第五巻と『羣經音辨』第六巻に重出する文字について、その記述を比較することにより、第一巻～第五巻の辨字同音異はいわば『經典釋文』注音法の解説のようなものになっているが、巻六は多音字の形態論的分析のようなものになっていることを明らかにした。次いで、『羣經音辨』巻六所載の字について、字ごとに、その記述が『經典釋文』の注音状況とどの程度合致しているのか、調査した結果、『經典釋文』とは合致しない部分が少なくなく、多音字の音義関係を系統的、體系的なものとして記述すべく、『釋文』の反切について時に牽強附會といわざるをえないような解釋をすることもあることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：Jia Changchao 賈昌朝's Qunjing Yinbian 羣經音辨(QY) explains the relation between pronunciation and meaning of more than 1100 polyphonic characters, and made a tremendous impact on posterity. Jia collected material from Jingdianshiwen 經典釋文(JS). QY consists of seven volumes in total. The first five volumes are allotted to faithful explanations of the phonetic notation in JS, and contain all possible alternative pronunciations of 899 characters. The variation of pronunciation resulted from phonetic loan, misuse of graphically similar character, derivation by phonetic change, and so forth. Unlike the previous volumes, Volume six exclusively picks up the pairs of pronunciation variants caused by the word derivation, and does not completely agree with JS.

研究分野：中国語学

キーワード：經典釋文 羣經音辨 多音字 訓詁

1. 研究開始当初の背景

(1) 従来の多音字研究では原資料である実際の音注よりも、二次的な『羣經音辨』や『經史動靜字音』などの記述を拠り所にし、その解釈を踏襲するだけのものが多かった。

(2) 『羣經音辨』は辨字同音異、辨字音聲濁、辨彼此異音、辨字音疑混、辨字訓得失の五門に分かれており、辨字同音異は巻一から巻五に、辨字訓得失は巻七に、その他の三門は巻六に収められている。分量的には七巻のうちの五巻を占める辨字同音異が最も多いが、後世に及ぼした影響では巻六の三門に及ばず、現代でもなお、その記述は多くの多音字研究に信頼性の高いデータとして用いられているが、その妥当性について調査する必要があると考えられる。

2. 研究の目的

『羣經音辨』巻六の記述は、実際は、時に宋代以降の品詞観によって『經典釋文』の音注について牽強付会な解釈をした部分もある。この課題の最終的な目的は、多音字の音注解釈の際に参考にされる二次資料の中で代表的なもので、以後の多音字の解釈に多大な影響を与えたと思われる『羣經音辨』巻六の記述の妥当性について調査・考察し、現代でも権威ある多音字解説として機能している『羣經音辨』巻六のうち賈昌朝の創造にかかる部分がどの程度の割合を占めるのかについて明らかにすることである。

3. 研究の方法

(1) 『羣經音辨』第一巻～第五巻と『羣經音辨』第六巻に重出する文字について、その記述を比較することにより、他の巻とは異なる第六巻の性格を明らかにする。

(2) 『羣經音辨』第六巻の性格を明らかにした上で、次にその記述を『經典釋文』の実際の注音状況と比較し、どの程度妥当性があるのかを検証する。当初は、『羣經音辨』で音義関係が記述されている多音字のうち、『經典釋文』ではほとんど注音のないものについて、『經典釋文』のどの記述が根拠にその解釈がなされたのかを調査することにより、その解釈が正しくないことを明らかにする予定であったが、調査の過程で、『經典釋文』の音注が少なくない字でも、『羣經音辨』巻六の記述と注音状況が異なるものがあり、巻六収録字の全面的な調査を行っている。

4. 研究成果

(1) 『羣經音辨』巻二～巻五(辨字同音異)と巻六(辨字音清濁、辨彼此異音、辨字音疑混)に重出する文字の記載内容を比較した結果は以下の通り。

『羣經音辨』自序に「一日辨字同音異、凡

經典有一字數用者、咸類以篆文、釋以經、先儒稱當作、當爲者、皆謂字誤、則所不取、其讀日、讀爲、讀如之類、則是借音、固當具載」というように、辨字同音異は、字を『說文』の部首の順に配列し、經注に根拠のあるものは、古注に「讀日」「讀爲」「讀如」という通用の例についても採録している。それに対して、巻六の三門の記述は三音以上の異讀がある字も必ず二音二義を一組として選擇し、音については聲母が同じ場合は反切上字を韻母が同じ場合は反切下字を共通にすることが比較的多い。義釋は、辨字音清濁門では「甲、…也、…曰甲」、「甲、…也、所以…曰甲」、「甲、乙也、既乙曰甲」、「甲、乙也、謂乙曰甲」、「甲、乙也、乙者曰甲」、「甲、乙也、乙謂之甲」と和「甲、乙…也、乙謂之甲」の五形式、辨彼此異音、辨字音疑混ではすべて「…曰甲、…曰甲」という形式が用いられ、「…」の部分には前後で共通の文字を用いることが多い。その解釋は、辨字同音異が經注の訓に根拠を求めることが多く、『釋文』の音を網羅的に列挙しようとするのに対し、巻六の三門は必ずしも『釋文』に忠實でなく、『釋文』に何らかの拠りどころを求めはするものの、二音二義の音義関係に無理にでも規則性を見出し、多音字の音義関係を系統的、体系的なものとして記述すべく、『釋文』の反切について時に牽強附會といわざるをえないような解釋をする。そのため、辨字同音異はいわば『釋文』注音法の解説のようなものになっているが、巻六は多音字の形態論的分析のようなものになっている。

一字に音が多数あり音により意味が異なる多音字は常用字も多く、識字教育の課程の初期段階で身につけるべき事柄だったと思われるが、228字を収めた『音辨』巻六は分量的にも手頃で記憶にも便利な多音字解説資料だったに違いない。教育課程に取り込まれたことで、多音字に関する知識は讀書人層に深く浸透していっただろう。『資治通鑑』胡三省注の音注が多音字に執拗に音を付けるのもその表れである。現在でも多音字が必要以上に形態論の研究対象として取り扱われるのも、『音辨』巻六が創りあげた精緻な多音字音義体系の影響が大きいと思われる。(2) 『音辨』巻六のみが大きな影響力を持ちえた理由を考察して、それが、識字教育の課程の初期段階で身につけるべき多音字を学ぶには適した資料だったからだと考えたが、次に、その資料が実際はどの程度賈昌朝の創作だったのかを調査するため、『羣經音辨』巻六収録字の『經典釋文』での注音状況を字毎に確認する作業を行った。当初は、『羣經音辨』巻六収録字のうち『經典釋文』に注音のほとんどないもののみ調査する予定であったが、調査の過程で、音注の多寡にかかわらず、『羣經音辨』巻六の記述と『經典釋文』の注音状況が合わないものがあることが明らかになったため、巻六収録字について、全面的に調査を行っている。全てについて詳細

に調査結果を報告することは不可能なので、一例として、「主な発表論文等」に挙げた「假」字音義辨析(『研究論集』)を取り上げる。

『羣經音辨』巻六およびそれを踏襲した『經史動靜字音』には、「假」について「かりる」の場合は上声、「かす」の場合は去声を読むとの記載があるが、『經典釋文』はもちろんのこと、『漢書』注の「假」字注にもそのような区別を示唆する音注の存在は認められない。ただし、「借」字については、「かりる」の場合は入声、「かす」の場合は去声を読むという『羣經音辨』の記述は『經典釋文』に合い、「假」に去声音が注されるのは、假借」という複合語において「かす」という意味を表す場合に限られる。

この成果は、2014年度日本中国学会の学界展望(語学)でも「近年、盛んに議論されている上古漢語の形態論とも関わってくる。例えば、金理新『上古漢語形態研究』(黄山書社、2006)は、『左伝』杜預注、『經典釋文』、『羣經音辨』などにみられる「假」字の上声・去声の記載を根拠に、上古音として中古上声に対応するものに接尾辞*fiを、中古去声に対応するものに接尾辞*sをたて、形態論上の議論を展開している。金氏は、後世の字書類にみられる字音をそのまま上古音再構の根拠にしているのであるが、森賀説が正しければその根拠を失うことになる。森賀論文のような着実な研究が積み重ねられることが、上古音研究の観点からも期待される。」との評価を受けている。

また、字が通用字として用いられる場合、その音その文字の音と見做すか否かについては、判断の難しい場合がある。例を挙げる。

『説文解字』に見える「亨」(五篇下音部)は「亨」、「享」、「烹」の古字である。言い換えれば、「亨」、「享」、「烹」は同源である。「亨」字段注の「其形、薦神作亨、亦作享、飪物作亨、亦作烹、易之元亨、則皆作亨、皆今字也(その形、神に薦めるは亨に作り、亦た享字に作る。物を飪は亨に作り、亦た烹に作る。易の元亨は則ち皆な亨に作る。皆な今字なり)」という記述によれば、「亨」は「享」、「烹」に通用するが、「享」、「烹」はそれぞれ「薦神」、「飪物」の意の専用字であるということになる。現代漢語(普通話)では「亨」は hēng 専用、「烹」は pēng 専用、「享」は xiǎng 専用と、はっきりと書き分けられているが、古くは「亨」は「享」、「烹」に通用していたようで、『廣韻』でも「亨」は脞(許庚切)小韻、磅(撫庚切)小韻、響(許兩切)小韻に見え、釋義はそれぞれ「通也」、「煑也」、「獻也、祭也、臨也、向也、歆也」となっており、「享」、「烹」は「亨」の或體字扱いである。

『音辨』では「亨」は辨字同音異と辨字音清濁に見える。

『音辨』巻二・辨字同音異「亨、嘉之會也

(許庚切)、亨、淪也(普庚切、禮内饗掌割亨、又普孟切)、亨、獻也(許兩切)。

『音辨』巻六・辨字音聲濁「亨、獻也(呼兩切)、神受其獻曰亨(呼亮切)。

「嘉之會」は『易』乾の卦辭「元亨利貞」の「亨」について文言傳が「亨者嘉之會也」と説くのに拠る。『廣韻』の「通也」である。

「淪」は煮るの意で、「普庚切」は『廣韻』の「撫庚切」と同音、現代漢語では「烹」に作るものである。辨字同音異の「亨」の音義の解説は又音の「普孟切」を除けば『廣韻』と合う。辨字音聲濁は、現代漢語では「享」に作る例のみを取り上げるが、『廣韻』と同音の「呼兩切」だけでなく、その去聲音を載せて、上去で意味が異なるかのような解釈をする。

『經典釋文』調査の結果は以下の通りである。「烹」音 4 例はすべて「烹」本音のみが注される。「享」音 34 例はすべてまず「享」本音が示されるが、又音が附されるものがあり、又音の中には「享」を「亨」、「烹」に讀ませる文の解釋の違いを示すものもあるが、字義や文意の解釋の違いとは関わりのない「享」去聲音もある。「享」去聲音が現われるのは毛詩音義の徐邈音、周禮音義、儀禮音義の劉昌宗音、禮記音義、左傳音義の舊音に限られる。「亨」は「烹」、「享」に通用するので、「亨」56 例の音注の中には「亨」本音の他に「烹」本音、「享」本音もあり、また「亨」、「烹」の去聲音もある。

「享」本音は上聲、「烹」本音は平聲であるが、又音に去聲音が見えることは共通している。また、その去聲音は徐邈、劉昌宗の音あるいは舊音である。徐邈は『晉書』に傳があり、東晉隆安元年(397)に卒したことがわかる。劉昌宗は正史に傳はないが、徐邈や郭璞と同時代の人物だと考えられている。

『梁書』沈約傳には、梁の武帝と周捨の四聲に関する有名な問答があり、沈約が『四聲譜』を著した頃から漸く四聲が認識されたのだという説もある。それには反論もあるが、魏晉は上古音から中古音の過渡期でもあり、聲調も中古音の四聲とは異なっていたであろうことは想像に難くない。『釋文』が引く晉の呂忱『字林』の音は平聲 - 去聲の混同、上聲 - 去聲の混同が多く見られるという。徐邈と劉昌宗の去聲音も平聲、上聲との混同の結果であろう。

『音辨』巻二・辨字同音異の記述は『釋文』の「亨」の注音状況と概ね一致する。しかし、巻六・辨字音聲濁が「享」本音と「享」去聲音を意味の違いを反映するものと解釋するのは『釋文』に根拠があるとはいえない。「亨」の釋文に見える「享」去聲音は 2 例のみだが、いずれも首音でなく、1 例は劉昌宗音、1 例は舊音として附される又音である。「享」本音と「享」去聲音の違いが意味の違いに対応するものとは考えられないからである。

「享」のほかにも、「親」「文」「粉」「巾」「名」など、『羣經音辨』巻六で変音構詞の

根拠にしばしば用いられるのは、徐邈と劉昌宗の去聲音で、それが唯一の根拠になる場合も少なくない。

『羣經音辨』巻六の『經典釋文』に何らかの據りどころを求めはするものの、二音二義の音義關係に無理にでも規則性を見出し、多音字の音義關係を系統的、體系的なものとして記述すべく、『經典釋文』の反切について時に牽強附會といわざるをえないような解釋をする」という傾向は明らかだといえる。

最初の予定より作業量が増えたことで、『羣經音辨』巻六収録字207字全てについて、調査が終了したわけではないが、現在の段階で、『羣經音辨』巻六の記述が辛うじて誤りでないと言えるのは、調査済みデータのうち、半分にも満たない。従って、『羣經音辨』巻六およびその記述を踏襲した『經史動靜字音』などを、多音字研究の際に、唐以前の音變の根拠として用いることは妥当ではない。それを明らかにしたことにより、この研究の当初の目的は果たせたと考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 7件)

森賀一恵、『羣經音辨』巻六について(3)、富山大学人文学部紀要、査読無、64号、2016、167 - 185

森賀一恵、『羣經音辨』巻六について(2)、富山大学人文学部紀要、査読無、62号、2015、187 - 205

森賀一恵、『經史動靜字音』について、富山大学人文学部紀要、査読無、61号、2014、129 - 137

森賀一恵、「假」字音義辨析、東方學研究論集刊行會編『東方學研究論集』(臨川書店) 査読無、2014、268 - 281

森賀一恵、釋文亨字音義辨析、富山大学人文学部紀要、査読無、60号、2014、41 - 49

森賀一恵、『羣經音辨』巻六について、富山大学人文学部紀要、査読無、59号、2013、35 - 76

森賀一恵、『經典釋文』と朱熹注音、富山大学人文学部紀要、査読無、57号、2012、73-119

〔学会発表〕(計 0件)

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

取得状況(計 0件)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

森賀 一恵 (MORIGA, Kazue)

富山大学・人文学部・教授

研究者番号：60243094